宝探し

佐々木香奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宝探し

【Ｎコード】
Ｎ３８４７Ｄ

【作者名】
佐々木香奈

【あらすじ】
ゆかりたちが目覚めたのは、見知らぬ何もない白い部屋。気が付けば、身体に機械が取り付けてあった。そして、ゆかりたちが見つけたレバー。それを下にさげた時、何かが起こった。『宝を探せさもなくば――』ゆかりたちを脅す人物。ゆかりたちを襲う人間。果たして、ゆかりたちの運命は？

プロローグ（前書き）

グロテスクな表現がされている部分があります。
苦手な方はご遠慮ください。

プロローグ

プロローグ

『団体遊び』それは、日本が決めた犯罪者達への罰である。

二三〇〇年　春

今年、我が国日本はあることについて悩んでいた。それは、「青少年犯罪」だ。１０代からの犯罪者がこの１０年の間に約３万人近くに亘った。これらかの日本はどうなるのか？　そう不安に思った日本は、「青少年犯罪」を無くす為ある考えを出した。

それは、『団体遊び』という恐怖の遊びだった。ゲーム感覚で犯罪者達が犯罪者達を殺させるという、何とも悲惨な遊びで勝者には脱獄を許すというものだった。

日本がこんな事を考え、実行すると世界に知れ渡った時は反対されたのだが、そこまで日本は悩まされていたのだった。手を打たないと、いずれ日本は犯罪者の国になってしまう。どうにかしなくてはと……。

これが日本の答えだった。誰に何と言われようと、日本はこの意見を変えることは無かった。

そして、これが実行されることは牢屋の中にいる者意外全員が知っていた。

プロローグ（後書き）

連載という形で投稿しています。
物凄く（？）長くなりそうなのでどうぞ
宜しくお願いします。

第一話　「ドア」

宝探し
作：佐々木香奈

第一話　「ドア」

1

「どうなってるのよ、これ？」
頭を抱えて、しゃがみこむ彼女は　江藤沙由（えとうさゆ）。
「知らねーよ。こっちが訊きてーよ」
それに答えるかのように呟く彼は中野将兵（なかのしょうへい）。
そんな二人を見つめる彼女は　舛田利菜（ますだりな）。
「やっぱり、これ取れないの？」
両足についた機械を取ろうとしている彼が　谷澤和真（やざわかずま）。
そして、何も無い白い部屋を見回す彼女は　下北（しもきた）ゆかり。
なぜか、何もない白い部屋にいる五人。目が覚めると身体に変な機械が取り付けられていることに気がついた。そして、みんな付いている場所が違うことも。
ゆかりの付いている場所は両手首。
丸刈りの和真は両足。
ハーフの沙由は首に。

天然パーマの将兵は頭に。
口数が少ない利菜は両腕に。
そう、この五人はなぜここにいるのか分からないでいる。目覚めたらここにいた。わけも分からない恐怖に怯える五人はただ、その場にいるしかない。
「どうしてドアは開かないのよ！」
乱暴に取って口を回す沙由に、将兵が突っ込む。
「お前バカだろ？　鍵がかかってんだから開くはずねぇだろ。頭使えや」
「うるさいわね、いちいち突っ込んでこないでよ！」
こんな状況でも、なぜそんなくだらないいい争いが出来るのかゆかりには到底理解できなかった。
「これ……何かな？」
そんな二人をよそに、利菜があるものを見つけた。
「どうしたの？」
ゆかりは利菜の元へと近寄ると、そこにはレバーのような物が飛び出ていた。壁の色と同化していて、下のほうにあったから今まで気づかなかったのだ。
「それ、もしかしたらドアのスイッチじゃ？」
和真の声に反応し、言い争っていた沙由と将兵もこちらに近寄ってくる。
「それを下にさげたらドアが開くんでしょ？　舛田……さんだっけ？　さっさっとそれ、さげてよ」
言われるがままに、利菜はレバーに手を伸ばした。その時、ゆかりはそれを止めた。
「ちょっと待って」
「何よ」
ゆかりを睨みつける沙由。
「もしかしたらそのレバーは、ドアのスイッチじゃないかもしれない……」

「は？　どういうことだよ」
と、まったくゆかりの言っている意味が分かっていない様子の将兵。
「だから、そのレバーをさげたら自分たちの身に何か起きるとか、危険があるかもしれない」
「考えすぎでしょ」
何も考えていない様子の沙由。自分の意見は絶対に曲げない自己中心的な性格の持ち主だ。
「いや、僕も下北さんに賛成だよ。本当に何か起こるかもしれない」
和真はレバーを見ながら言った。
「じゃあ、そのレバーはずっとさげないでいるのか？　もしそれがドアのスイッチだったら俺たちはずっとここから出られないまま餓死するだけだ」
中野将兵の言う事もわかるが、ゆかりはまだもう少し様子を見たかった。
「でも、たとえ中野君の言うと通りでも……危険性があるかもしれない。少し、様子を見てから……」
それでも、将兵はレバーをさげたいようだ。
「様子なんか見て、何が変わるんだよ？　こんな、何も無い真っ白な部屋で！」
怒鳴る将兵にゆかりの身体がビクっと反応する。
「そんな、怒鳴ることでもないよ」
注意する和真に「うるせーよ」と言葉を浴びせる将兵。
「ねえ……」
口を開いたのは利菜だった。だが将兵は、今度はお前かよ。という顔をしながら利菜をにらみつけた。
「……あ、あの。これ見つけたの私だし、レバーさげてもいいかな……？」
「ダメだよ、舛田さんの身に……」
利菜はゆかりのその言葉を遮った。
「覚悟は出来てるから。それに中野君たちの意見に私、賛成だし

……」
「だってよ」
いつも多い一言を口にする将兵。
ゆかりは、まだ納得できていない様子だったが利菜の決意に押されいいよ。と言ってしまった。
「谷澤君も、いい？」
将兵も、ゆかりと同じように納得できないようだが、何も言わず静かに頷いた。
「じゃあ……さげるから、みんな私から離れてくれる？」
利菜の言うと通り、ゆかり達四人は壁に寄り添った。
「……い、行くよ……」
ゆかりは、どうか何も起きないで予想通りドアが開きますように。と心の中で繰り返し祈っていた。
利菜がレバーを押したその時、ガゴンと鈍い音がした。
ゆかりの祈りが通じたのか、ドアの鍵が開いたのだ。
「ホラ見ろ。やっぱり何も起こらなかったじゃねぇか」
なんだか、将兵の台詞は一番安心したと思わせた。
「ほんと、何も無くて良かったわ」
ゆかりは、沙由の素直なところを初めて見たのだった。
「同感」
と、和真。
「じゃあ、ドア開けてみようか……」
利菜がそういって立ち上がろうとしたその時だった。
「何この音……？」
最初に気づいたのは沙由だった。
「本当だ……」
次に和真。そして将兵、ゆかり……。
「やだっ……」
声を漏らす利菜。
そう、たしかにゆかりの耳にも届いている。ピ、ピ、ピ、ピ、ピ、ピ

……と。そう、それは段々早くなっていることに五人は気づいていた。
「離れるんだみんな！」
利菜から離れようと四人は一斉に角へ集まった。
「ねぇ、やだ！　助けて！　嫌だ！」
腰が抜けているのか、必死にこちらへ這いつくばって近づいてくる。それはもうゾンビのようでゆかりは生まれて初めてこんなに恐怖を味わった。
すると、この音はドアがなっているのではないことに気が付いた。
ゆかりは、自分たちのついているこの機械を思い出した。そう、利菜についている機械から鳴っているのだ。
「嘘……。嫌よ……」
そう呟いた時だった……。
途切れ途切れになっていた音も何かに反応したような繋がった音になり、ゆかりの叫び声と爆発音が重なった。
沙由は爆風で壁に頭を打ち、そのまま床に崩れ落ちた。
「な、何が起こったんだよ……」
今の状況に全く付いていけない将兵は、咳き込みながら煙で見えない辺りを見回す。
「嫌よ……。嫌……こんなの嘘だ……」
パニックになったゆかりは、もうこれからどうしたらいいか考えられなかった。ただ、目の前の現実が嘘だと願っている。
和真は酷く咳き込んで自分に低一杯だった。
だんだん、煙が晴れて辺りが見えてくると利菜の姿が見えた。利菜は、爆発の衝撃で床に転がっている状態だった。
「おい！　何だよ、あれ！」
将兵の指差す方向を、まだ軽く咳き込みながらも和真は見る。
「え……」
その利菜の姿に言葉が出てこない。
顔を覆っていた手を離し、ゆかりは目を開ける。そこには腕の無

い利菜の姿が映っていた。
「何なんだよ、これ……」
利菜の姿を見て驚く将兵にゆかりは声を震わせながらこう言った。
「爆発したのよ……利菜の腕についていた、機械が……」
「じゃあ、これも……」
和真は自分の両足についている機械を見ながら呟いた。
「冗談じゃねぇよ！　こんなの！」
大声を出す将兵は、頭についている機械を必死に取ろうとする。
「無理にやって壊しても爆発すると思う……」
と、案外冷静なゆかり。
「……たすけ……てよ……」
微かに聞こえた声は、たしかに利菜のものだった。彼女は、自分の腕が爆発したことには気づいてはいるのだが、今にも気絶しそうなほどの痛みと戦っていた。
「……舛田さん……」
ゆかりが呼びかけると、彼女は苦しそうに息を吐きながら助けを求めた。
「だ、れか……」
いくら利菜が助けを求めたところで、助けられる怪我でもない。ゆかり達は一歩も動こうとはしなかった。
「ね……え……」
利菜の腕からは休むことなく血が出てきて、利菜の周りは血の海となっていた。
「舛田さん……」
ただ、ゆかりは利菜のことを呼び続けるしかなかった。
将兵は、この場から早く逃げたいのか足を前に出しこう言った。
「……ドアは開いてるはずだから、出るぞ……」
その言葉に、ゆかりは目を大きくして口を開く。
「どうしてそんなことが言えるの！　舛田さんが……！　舛田さんを置いていくの！」

その言葉に、和真は落ち着こう。とゆかりに囁いて続けた。
「僕もこの部屋から出たほうがいいと思う……」
「谷澤君まで！　二人とも舛田さんはどうでもいいって言うの！」
ゆかりが大声で二人に問いかけると、その質問に将兵が答えた。
「どうでもいくねぇだろ！　じゃあ、逆に訊く。俺たちはここにいてアイツを治せるのか？　それにもう、手遅れだよ。出血が酷すぎる……」
ゆかりは強く手を握って、黙り込んでしまった。
「行こう。下北さん……。ここにいたって辛いだけだよ」
ゆかりは、涙を流しながらコクリと小さく。
利菜はまだうめき声を上げながら助けを求めている。そんな姿をゆかりはもう見ることができず、顔を伏せて利菜のうめき声しか聞いてやることぐらいしかできなかった。
将兵は、ドアの取って口にそっと手を触れる。……だが、何も起こらない。ドアノブをゆっくり回すと、ギィィと古びた音を出しながら扉は開いた。
「大丈夫だ、ドアは開いた。何もおこらない」
和真は、ドアが開いたことを確認してから先ほどの爆発で気絶してしまった沙由の元へ駆け寄り、沙由を抱き上げた。
「さぁ……」
沙由を抱き上げた和真は、ゆかりに呟いた。
ゆかりは、頷きもせずもう一度利菜の方に視線を送った。
利菜は、もう、目を開けたまま動きはしなかった。ただ、微かにうめき声を上げていた。そのうめき声はゆかりには「呪ってやる」と聞こえた。
怖くなったゆかりは、助けられない罪の意識を感じながらドアを抜けた。
最後に入って来た沙由を抱えた和真は、片手でドアを閉めると鍵が閉まる音がした。
どうやら、オートロックのようだ。

ドアを抜けたら今度は長方形型の部屋になっていて、先ほどと同様、何も無い真っ白な部屋だ。そして、さっきと違うところは、茶色い鞄が四つあるだけだった。
将兵が突然振り返り、鞄を指差しこう言った。
「どう思うよ、あれ」
「どうって……」
和真は、沙由をゆっくりと下ろし、答えた。
ゆかりは、さっきのことがショックで口など開ける状態じゃなかった。逆に、なぜ二人が何もなかったのかのように会話を続けているのが不思議で堪らなかった。
「何か、入っているのは確かだよな……」
「そ、そうだね」
将兵は、用心深くその鞄に近づきながらこんな冗談を口にした。
「また爆発したりしてな……」
その言葉に、ゆかりは先ほどの爆発を思い出した。
最初は、何がなんだか分からなくて……。気が付いたら……利菜が倒れていて腕がなかった。利菜の周りは、血だらけで……。助けられなかった。
将兵は、汗ばんだ手で鞄を一つ手に取る。
「鞄には何も仕掛けとかはない」
安心した将兵は、そう告げた。
「良かった……」
和真も、将兵の元へ行く。
そこで、ゆかりは耐え切れなくなり、泣き叫んだ。
「ねぇ、どうしてよ！　どうして二人はそんな普通に話しているの！　さっきあんなことがあったのに……ショックじゃなかったの？」
ここで、初めて和真がキレた瞬間だった。
「泣き叫びたいのはこっちだよ！　どうして君は我慢が出来ないんだ！　こういう風に泣き叫んで欲しくないから僕たちがこうやっ

ているのに、どうして君は分からないんだ！」
怒鳴られたゆかりは、涙を流しながら唇をかみ締めた。
「あんなことがあったら……誰でも動揺するんだよ！」
そう、同じだった。助けられない罪の意識を感じているのは私だけじゃない。
ゆかりは、小さく言った。
「ごめん……」
そこで、三人とも口を閉じた。
この沈黙を破ったのは、将兵だった。
「お、おい。鞄の中身調べようぜ」
三人は、鞄の中身を調べ始めた。中には、この建物の地図と思われる紙。パンが五つに五百ミリリットルの水が二本。果物ナイフ、鋏だった。どの鞄の中にも全部同じものが入っていた。
そこで、ゆかりがポケットの中を確かめた時だった。
「あれ……？」
手を入れたとき、紙の感触がしたのだ。
ゆかりは、ポケットの中から四つ折にされていた紙を取り出した。
「何だそれ？」
将兵の問に「わからない」と言いながら、紙を広げる。
そして、紙に書かれていることをゆかりは口にして読んだ。
「ようこそ。君たちがなぜここに来たかわからないと思う。だが、今から始めるゲームをやっているうちに、なぜここへ連れてこられたか分かると思う。
では、ゲームの説明をしよう。ルールは簡単だ。君たちの身体に付いている機械が爆発することはもう知っているね。実は、その機械、鍵で取れる仕組みになっている。そこで、君たちにはその鍵を捜しもらおう。　だが、忠告する。鍵は自分の物を探さなくてはいけない。別の鍵でその機会をあけようとすると爆発するから気をつけたまえ。
最後に、刃物で人を傷つけてはいけない。もし、ルールを破れば

機械が爆発することをお忘れなく……」
読み終えたゆかりの手から、紙がひらりと地面に落ちた。
「……何なんだよ……」
死と隣り合わせのゲームに強制参加させられたゆかりたちは頭が真っ白になった。

「今」1

二千三十四年

あの、悲惨なゲームが終わって四年。自分たちが犯した罪。人を殺める感覚。まだ、全ての感覚が残っている。

あの時を思い出せば、頭がズキズキと痛む。怖くなって、今度はあの白い部屋で一人ぼっちになった気分になる。そしたら、またレバーがあって……。今度は自分が餌食になる。

ベットに座りながらゆかりは窓の景色を見ながら、思っていた。すると、いつもの男が話しかけてきた。

「調子はどうだい？」

振り向く必要もなく、ゆかりは死んだ目で答える。

「別に……」

「君ももう、十九歳だ。そろそろ……どうかね？」

ゆかりには、男の言っていることが通じた。

「嫌よ。もう、見たくない。あんただって見たくない……」

「だけど、和真君や将兵君はもう行っている。約束したんだからね」

ゆかりは、振り向き男の目を見る。

「……いいのよ！　ほっといて……！　いつか消えてしまう自分もみんなも嫌なの！」

だが、男はゆかりに挑発するようにこう言った。

「ずっとここにいるんだね？　でもここにいるあの子たちには会えないよ、残念だけど」

ゆかりは男を睨みつける。

「閏悟と鈴は関係ない！　会っても……傷つけるから。殺してしまうかもしれない……」

最後のは聞き取れないほど、小さな声だった。

「ほっとて……」
ゆかりの言葉に男は、静かにその場を立ち去った。
「人間なんて……嫌いよ……。いつか消えてしまうもの……」
ゆかりは、声を出して泣き出した。
「ごめんなさい……閨悟……鈴……」

「今」1（後書き）

この回は、ゲームが終わって四年後という話です。
第二話が終われば、「今」2を書きたいと思っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3847d/

宝探し

2010年11月17日05時56分発行